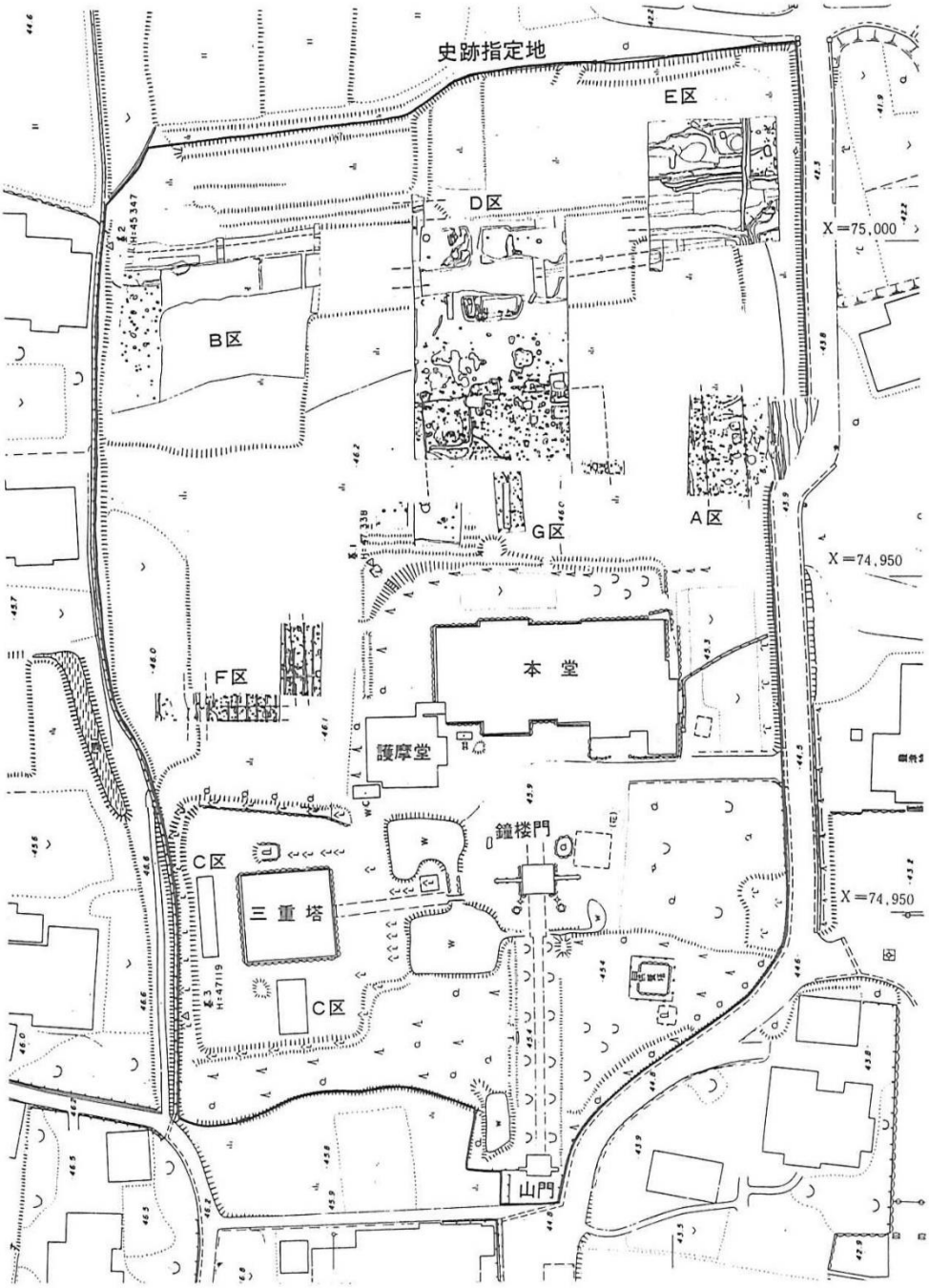
●豊前国分寺の再検討３

1995 年刊の『史跡　豊前国分寺跡―発掘調査及び環境整事業実施報告書』（豊津町教育委員会刊）によってこれまでの発掘結果を精査した。

発掘の結果確認された遺構は以下の通り。



（「豊前国分寺発掘調査区配置図」を参照）

１：伽藍配置

★現本堂の北に講堂と思われる基壇を発掘（Ｄ区）
　東西約２７ｍ。南北幅は未確認。
　地山を削り出したもの。
　確認された高さは 0.1～0.3ｍ。
　基壇の北側に幅 3.5m の階段が付く。

※ここまでは「再検討２」と同様だが、基壇の主軸が異なっている。
　現国分寺の主軸はほぼ座標北（＝真北）に一致しており、講堂と思しき基壇の方位は、西偏３度としている。
　したがって中世のものと判断された寺域区画溝の方位西偏５度とは異なることが確定。
　周辺の遺物から、基壇外面に外装として塼を積み、基壇上には礎石を置いていたことがわかる。
　中世の 14・15 世紀には破壊された模様。
※ここも「再精査２」と同じ。

★現本堂の西のＦ地区から
１：南北に伸びる二条の柱穴列
　幅 2.1m で南北に 8.7m 伸びる二条の柱穴列（SB4002)発見。この方位は基壇の方位とほぼ同じか？　柱穴の大きさは 40 ㎝前後。

　報告書ではまとめである「小結」でこの二条の柱穴列(SB4002)に言及し、「回廊の可能性あり」とはするが、調査範囲が狭いことを理由に結論を出さず。
　これが回廊だとすると、先の講堂と思しき基壇の中心からの距離は約 30m であり、講堂に取りつく回廊と考えれば、回廊の東西幅は約 60m となり、講堂の幅 27m の約倍と狭い形式となる。

　これを踏まえると、西偏３度の伽藍は、講堂に東西幅 60m の南北に長い回廊が取りつく形となり、伽藍形式としては、南大門―中門―塔―金堂―講堂が南北に一直線に並ぶ四天王寺式が想定でき、金堂は現本堂の辺り、塔は現鐘楼門のあたり、中門が現山門の少し北と推定できる。

２：東西に伸びる二条の柱穴列
　またこの南北の二条の柱穴（SB4002）のすぐ西 2.5m ほどの場所で、SB4002 の南側をほ

ぼ東西に延びる、幅２ｍで東西に 7.9ｍ伸びる二条の柱穴列（SB4001)がみつかっており、「小結」では、現在の本堂の西に位置することから、「金堂から西方に延びたのち南方に屈折する回廊の一部か」と推定しているが、これも調査範囲の狭さを理由に結論を保留している。

この二条の柱穴列は西側で中世の区画溝で切断されているので、その東西幅は確定できないが、中世の溝で切断された地点で、講堂と判断された基壇遺構の中軸線からの距離は 45m ほどあり、これを東側に延ばせば、東西幅およそ 90m 近くの回廊となり、この遺構は、西偏３度の伽藍に先行する正方位の、東西幅 90m ほどの東西に長い回廊の一部であり、現本堂の場所にあるのは金堂ではなくて講堂で、回廊の中に塔と金堂とが東西に並ぶ形式などが想定される。

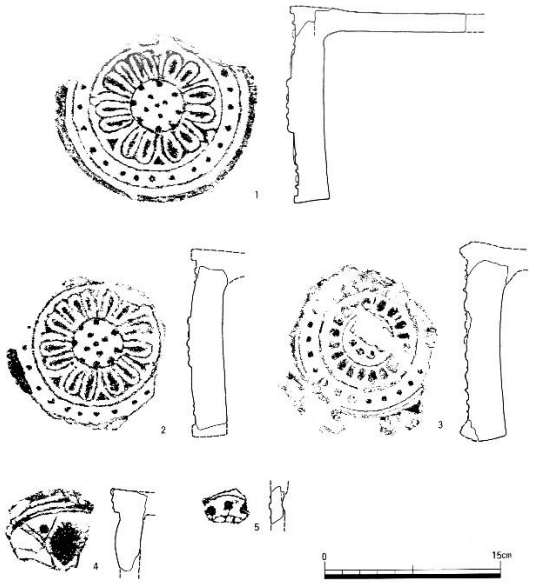
★出土遺物のうち瓦について

表採資料も含めてさまざまな形式のものが出土している。軒丸瓦では、百済系単弁八葉・高句麗系・老司系単弁一九葉・鴻臚館系複弁七葉のほかにも単弁一三葉・単弁一六葉・単弁三七葉・複弁八葉などがある。軒平瓦では、重弧文・新羅系・老司系・法隆寺系などがあり、鬼瓦は大宰府系である。これらの瓦のうち、老司系と鴻臚館系の軒丸瓦及び老司系の軒平瓦は豊前国府跡出土のものと同笵である。法隆寺系軒平瓦は築城町船迫堂帰り瓦窯跡で製作されている。

※以上は「再検討２」で記述したところだが、本報告書で確認したところ、この平成６年の調査で確認された瓦は、

１：軒丸瓦（「豊前国分寺出土軒丸瓦」参照）

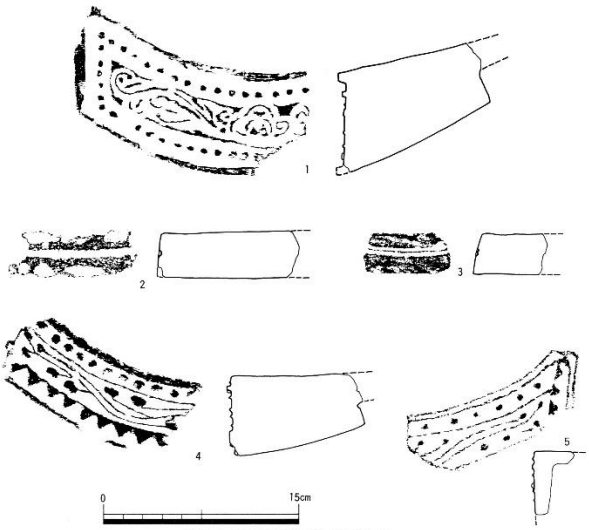
・鴻臚館系複弁７葉蓮華文（１・２）
・老司系単弁 19 葉蓮華文（３）
・高句麗系単弁蓮華文（４）



第19図　出土軒丸瓦実測図（縮尺1/3）

２：軒平瓦（豊前国分寺出土軒平瓦」参照）

・老司系偏行唐草文（４・５）
・法隆寺系忍冬唐草文（１）
・重圏文（２・３）



第20図　出土軒平瓦実測図（縮尺1/3）

と報告されている。

軒丸瓦の高句麗系は明らかに素弁であり、従来報告されている百済系単弁８葉と同様にもっとも古い時期の瓦であり、これとセットで使われたのが、重圏文軒平瓦である。

以上を総合すると豊前国分寺の変遷が詳しくわかる。

★豊前国分寺の変遷

１：創建期　６世紀末～７世紀初

百済系単弁八葉蓮華文軒丸瓦＋重圏文軒平瓦が出土しているため。
伽藍方位は正方位。
伽藍配置は、講堂に回廊が取りつき、東西に長い回廊の中に塔と金堂がある形式。

２：再建期　７世紀前半～７世紀中頃

老司系単弁蓮華文軒丸瓦や鴻臚館系複弁軒丸瓦が出土し、これとセットになる老司系偏行軒平瓦が出土しているため。

※従来これらは７世紀後半から末と考えたが、福岡県行橋市主催のシンポジウム「豊前国府誕生ー福原長者原遺跡とその時代」（平成 29 年３月４日実施）の資料
http://www.city.yukuhashi.fukuoka.jp/doc/2017041200045/files/fukubaru_sympo.pdf
に掲載された、「豊前国府の成立」という岡山理科大教授の亀田修一の講演記録によると、鴻臚館系複弁瓦は、太宰府Ⅱ期政庁跡から大量に出土していることがわかり、この正方位の政庁は８世紀中頃からとされているので、方位の考古学により年代を動かし７世紀中頃と

する。

ということは鴻臚館系複弁瓦の年代が７世紀中頃に遡り、これは畿内におけるその出現の７世紀末よりも早くなり、鴻臚館系よりわずかに早い老司系単弁瓦の年代も７世紀前半に遡る可能性が出てきた。

伽藍方位は西偏３度。

伽藍配置は回廊と思われる二条の柱列（SB4002）が講堂の中心軸からの距離は約 30m となるので、回廊の東西幅が約 60m と、講堂の東西幅の約二倍と狭いものと推定される。

このことから伽藍配置は、講堂に取りついた南北に長い回廊の中に、金堂と塔が南北に置かれる、講堂―金堂―塔―中門―南大門と南北に連なる、四天王寺式が想定される。

報告書は国分寺が聖武詔で作られたと考えているので、回廊は金堂に取りつき、塔は回廊の外、東南側と推定しているのと大いに異なる結果となる。

３：聖武詔による改造の可能性

塔跡も発見されず、金堂と目される現本堂も発掘していないため、さらには講堂と推定された基壇も上面の削平が激しく、のり面も後世の削平が激しいため確認が難しく、基壇の内部構造や掘り込み地業を確認するためのトレンチも掘っていない。

このため西偏３度の伽藍はどう改造されたかはまったく不明である。

そしてまた出土瓦の中に、聖武朝に特徴的な細身の花弁を持つ装飾的な単弁蓮華文軒丸瓦に似たものがある（「豊前国分寺の瓦」参照）。

「再検討１」で報告したが、

・珠文縁単弁 13 弁蓮華文軒丸瓦（図 150－4）

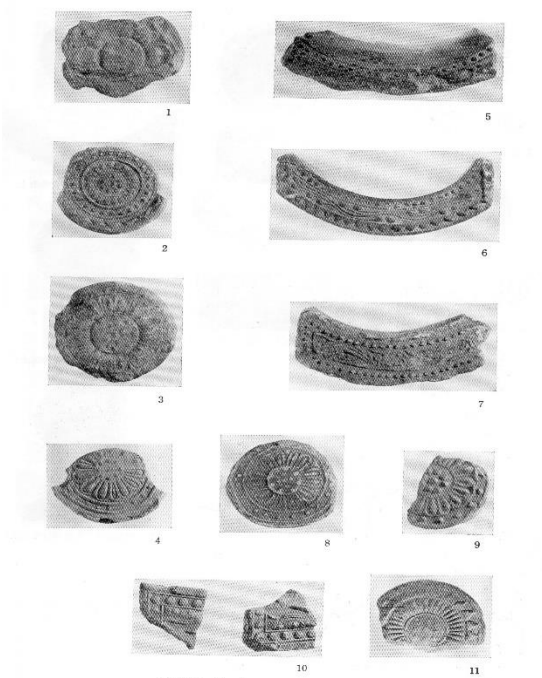
細い花弁。平城宮瓦 6138J に似る。

８世紀中頃か？

・珠文縁単弁 16 弁蓮華文軒丸瓦（図 150－9）

細い花弁。平城宮瓦 6138K に似る。

８世紀中頃か？



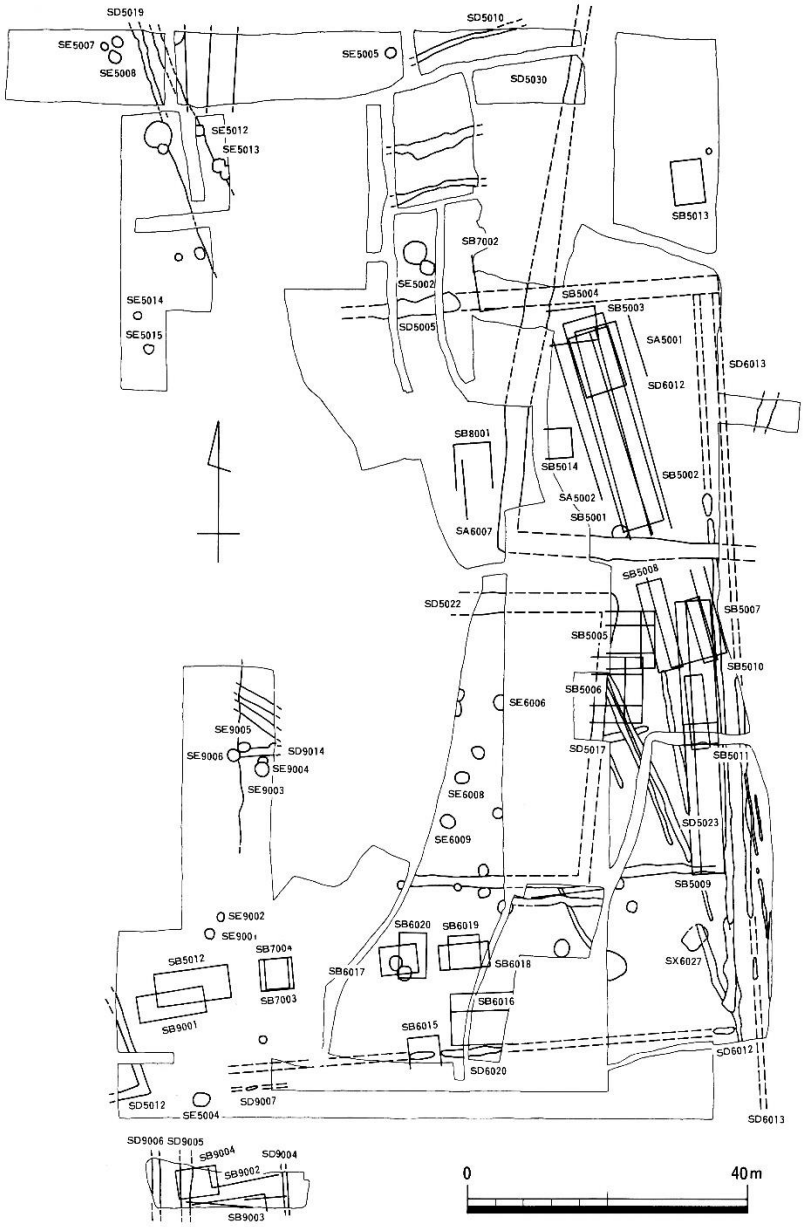
第150図 豊前国分寺の瓦

平城宮瓦とよく似た瓦が出土しているのだから、何らかの改造、つまり塔の七重塔への改造などが行われた可能性があるが、残念ながら遺構で確認することはできない。

★国府の発掘結果を踏まえて

政庁地区の発掘調査の最後平成６年度の調査外報、「豊前国府　平成６年度発掘調査外報」（1995 年豊津町教育委員会刊）で確認した。

調査の結果確認された遺構は「豊前国府政庁地区主要遺構配置図」を参照のこと。



第８図　豊前国府政庁推定地主要遺構配置図（縮尺1/800）

豊前国府遺跡はⅠ～Ⅴ期に分かれている。

Ⅰ期：７世紀代～８世紀前葉

⇒６世紀代～７世紀前葉

奈良文化財研究所のデータベースではほぼ正方位だが、現在このデータベースの閲覧ができないため、遺跡のどこにⅠ期遺構があったのかがわからない。

平成６年度調査の「宮ノ下Ｌトレンチ」(「主要遺構配置図」の最も南の発掘区）でほぼ正方位で、4.1m の距離を隔てる幅 1.3～1.9ｍの二条の溝がみつかっている。これは政庁を区画する築地塀の雨水溝と考えられ、溝から出た土器からⅢ期の新しい時期と考えられている。

だが、この溝から南に 100m ほど離れたところ、総社八幡宮の南の土壇からは百済系単弁蓮華文軒丸瓦とセットになる重圏文軒平瓦が出ているので、この土壇が政庁Ⅰ期の建物跡と考えると、先の正方位の二条の溝と築地塀は、Ⅰ期政庁の東北の区画と見ることも可能である。

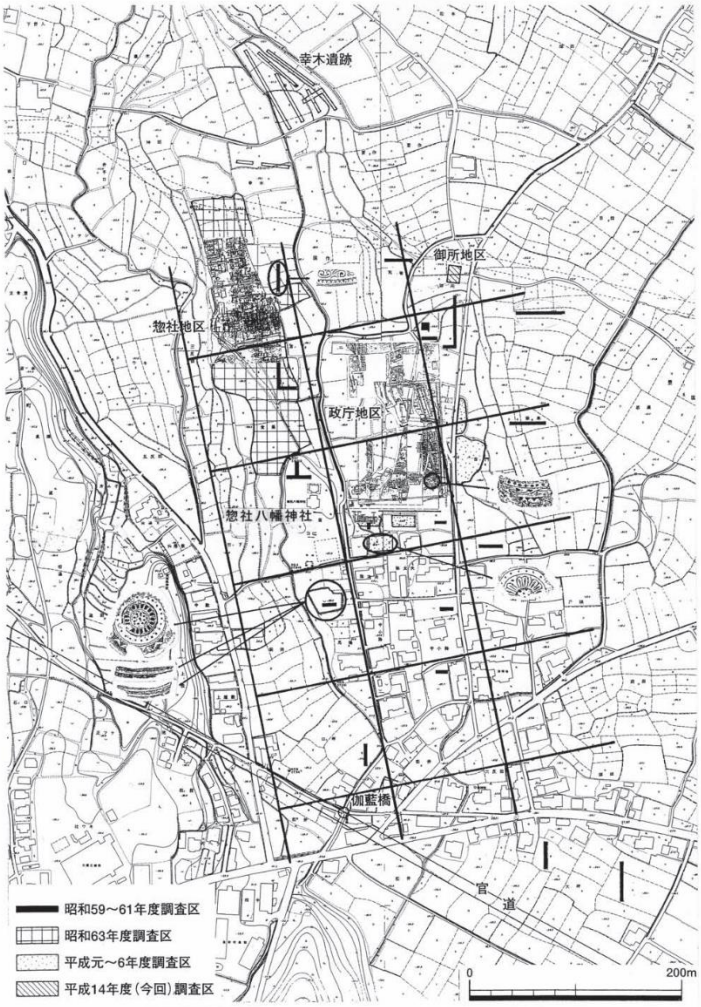


図２　豊前国府跡調査位置図・軒先瓦出土位置図(1/4,000)

（「豊前国府軒先瓦出土位置」を参照）

さらにこの二条の溝から北東 80m の所にもほぼ正方位で四面廂の大型掘立柱建物が二つあるので、ここもⅠ期政庁の候補となり、そう考えれば先の二条の溝と築地塀は、Ⅰ期政庁の西南の隅の区画と考えることもできる。

Ⅱ期：８世紀中葉～９世紀中葉
⇒７世紀中葉～９世紀中葉

場所は先ほどの正方位の二条の溝の北 10m ほどの所に、L 字型の大きな区画溝 SD5012 とその東の大型掘立柱建物群がある。L 字型の溝は、政庁を区画する溝の東南の隅と考えられている。

方位は西偏 10 度前後。

Ⅲ期：９世紀後葉～10 世紀後葉

Ⅱ期建物群の地域と重なり、その東や北に広がる、南北 105m、東西 80m ほどの築地塀とその両側の雨水溝で囲まれた方形区画。

方位は西偏 4 度。

東側の築地塀際に南北二棟からなる、東脇殿と見られる長大な掘立柱建物が見つかっている。

Ⅳ期：11 世紀前葉～12 世紀前葉

Ⅲ期の方形区画の北東部に南北二棟の東脇殿と見られる掘立柱建物が見つかっている。

方位は西偏 16 度 30 分

区画溝や築地塀は見つかっていない。

Ⅴ期：12 世紀中葉～13 世紀前葉

ⅢⅣ期政庁の中央と北東部に、東偏 10 度前後の幅 4ｍほどの区画溝で囲まれた方形区画が二か所見つかっている。

ここは国府政庁ではなく、豪族居館と考えられている。

したがって豊前国府政庁は、６世紀代～７世紀前葉に始まり、途中 3 度の建て替えを経て、12 世紀前葉、つまり平安時代末まで存続したことがわかる。

２：国府と国分寺の関係

「再検討２」で見たように、復元されたⅢ期政庁の南辺と国分寺との距離は、グーグルマップで見るとおよそ南西に 700m。国府近傍の寺だ。

国分寺は西偏 3 度。これに最も近い方位の国府遺構は９世紀後葉～10 世紀後葉のⅢ期政

庁。
　国分寺でいえば、平城宮瓦とよく似た瓦が使われていた時期だ。
　したがってこれ以前の老司系単弁蓮華文軒丸瓦や鴻臚館系複弁蓮華文軒丸瓦が使われていた時期の国分寺、つまり７世紀前半～中葉に始まる時期の国分寺に相当する国府政庁は、西偏 10 度前後のⅡ期政庁にあたる。
　この時期に国分寺も、正方位から西偏に作り替えられたように思われる。

　また先に見たようにもし国分寺に正方位の時期があったとすれば、これに対応する国府政庁は、６世紀代～７世紀前葉と見られる正方位のⅠ期政庁だ。
　これは国府では百済系とされる素弁蓮華文軒丸瓦とセットの重圏文軒平瓦が出土しているし、国分寺では、この百済系とされる素弁蓮華文軒丸瓦や高句麗系の素弁蓮華文軒丸瓦が出土し、さらにこれらとセットの重圏文軒平瓦が出土していることから、６世紀代から７世紀前葉に、700m ほどの至近距離に、どちらも正方位の国府と国府に付属した寺院が作られたことは、ほぼ確実である。

国府と国分寺の関係―まとめ―

１：豊前国府と国分寺は６世紀末から７世紀初頭の時期に、近接した位置に、正方位で作られた。伽藍配置は、塔と金堂が東西に長い回廊の中に置かれた古式の寺院が想定できる。

２：７世紀中葉以後に、国府と国分寺は共に西偏で作り直された。現在国分寺で確認できる古代の遺構の大部分はこの時期のもの。
　伽藍配置は、中門―塔―金堂―講堂が南北に並び、中門と講堂を回廊でつないだ中に、塔と金堂が南北に並ぶ、四天王寺式が想定できる。

３：８世紀中葉の聖武朝期に、平城京系の軒丸瓦が出土しているので、国分寺に大規模な改造が加えられた可能性はあるが、確認されたのが講堂と見られる基壇だけで、塔や金堂基壇も発見されていないので、遺構で改造を確認することはできない。

　以上で豊前国分寺の再考察は終える。

2021 年 4 月 17 日